

## <子どもの教育環境支援 × アフリカグッズ作成>

### ◆プロジェクト開始のきっかけ◆

2014年から2年間、ウガンダで青年海外協力隊員として活動中に会った、小さな小さな小学校、St. Kizito Junior Primary School。小さな教室の中には、瞳をキラキラ輝かせた子どもたちがたくさん。短い鉛筆を使って、みんな一生懸命に先生の授業を聞いていました。そーと教室をのぞいてみると、子どもたちは突然現れた外国人に興味津々。現地言葉で挨拶すると、大きな声で返事してくれました。



↑ St. Kizito Junior Primary School の教室の様子

もともと、この小学校を経営者するウガンダ人と知り合いだったため訪問しに行くことになったのですが、話を聞くと、どうやら孤児も数名通学しているとのこと。子どもたちが教育を受けることは大切という経営者の意向から、孤児については授業料を半額にするというサポートをしています。それでも、1日の収入は平均約2ドルというウガンダ。どの子どもたちの家庭も、教材や文房具等を購入するのは大変です。

そこで、この学校に通学する孤児を中心に支援をしようと始めたのがこのプロジェクト。先生方との話し合いから、外国人向けにかわいいアフリカグッズを作成してみようということに。ここはアフリカ。せっかくなら、アフリカ特有なものを活かしたアイテムを作成しようということで、伝統的な布である「チテンジ（※1）」を使って、先生や生徒がシュシュやピアスを手作り・販売し、その収益を孤児の教材費等に還元するという、売り手も買い手もハッピーになるプロジェクトが生まれました。

※1：チテンジは、アフリカでよく見かける伝統的な布です。模様もさまざまカラフル。身体に巻き付けてスカートにしたり、赤ちゃんを背負う時に使ったり、敷物にしたり、用途もさまざま！

◆活動場所、プロジェクト実施期間、販売商品について◆

- ・活動地：ウガンダ共和国ムベンデ県（首都カンバラから西へ約 150 km）
- ・対象校：St. Kizito Junior Primary School（日本の小学校と同等）
- ・プロジェクト実施期間：2015年6月～2015年12月
- ・販売商品：チテンジのシュシュ、チテンジのくるみボタンのピアス



↑ピアスを身につけた学校の先生

←チテンジのシュシュ

↓チテンジのくるみボタンのピアス





◆ シュシュやピアスを製作することが出来るようになるまで ◆



↑最初の縫い目はこのような状態でした…。

シュシュやピアスをつくろう！と言っても、日本のように家庭科や図工といった授業がウガンダには無いので、縫い物やピアスをつくるような細かい作業もみんな初めて！

シュシュの縫い目はガタガタ、ピアス用の布は糊でベタベタ…。

いったいどうなることやら…と頭を抱えてしまいましたが、何度も何度も練習をしていくうちに、少しずつ作業にも慣れていきました！

◆ 心がけていたこと ◆

最初は私が先生や子どもたちに直接教えていましたが、私から先生へ、先生から生徒へと教えてもらえるように徐々に変化させていきました。

私は現地にずっと居られるわけではありません。そのため、ここで働く先生たちに作り方を覚えてもらえれば、そこから生徒に少しでも残るのではないかと考えました。品質チェックも先生にしてもらうことで、どのような状態であれば良い商品で、何が不良品なのかを彼ら自身で判断できるように伝えていきました。



↑先生が生徒へ教えている様子

◆商品の販売先と販路拡大◆

まずは、JICA ウガンダ事務所で商品を販売させてもらうことになりました。

ですが、私が帰国した後、JICA に継続して置かせてもらうことは難しいので、JICA 以外の販売先も考えていかなければいけません。

というわけで、小学校の先生と一緒に、首都カンパラのおみやげ店を炎天下のなか歩いて突撃訪問するという作戦に出ました。店の規模はさまざまですが、30 店舗近くを一気に回り販路拡大を試みるも、商品を置かせてくれるお店はありませんでした…。

◆活動結果◆

JICA 事務所を訪問された方や他の青年海外協力隊員等、沢山のの人に商品を購入して頂きました。帰国時までの収益は、約 50 ドル。

たったそれだけ？と思うかもしれませんが。ウガンダでは 50 ドルあったら何が出来るでしょう？

この学校の生徒一人分の授業料に相当します。

ノートなら約 300 冊購入できます。

ボールペンも約 300 本購入できます。

それが、今のウガンダなのです。



←子どもたちの製作の様子

◆その後…◆

私の帰国間際、嬉しい出来事が起こりました。この学校の先生から連絡があり、炎天下の中、一緒に歩き回った首都のおみやげ店の一つから、商品を置きたいと電話が来たとのこと。また、同じ任地にいる隊員も、この活動をフォローしてくれることになりました。

その後の報告で、諸事情により残念ながら首都のおみやげ店で販売するという話は流れてしまったと聞いていますが、同じ任地の隊員が現在も引き継いで活動をしています。

商品の品質維持や販路獲得など、正直まだまだ課題もありますが、ウガンダの子どもたちが一人でも多く将来を切り拓いていけるようサポートを継続したいと考えています。

GBNのネットショップでも、この商品を通じて皆様のご支援・ご協力をいただけたらと、現地と連携しながら販売体制を整備している最中です。



↑ St. Kizito Junior Primary School の生徒と先生方